

初参式・入園・入学奉告式

そんらくしんらんしゅう **村落親鸞宗を信ずる者は仏寺にいたり**、がいけもん **改悔文を聴かしむる** (げいはんつうし 『芸藩通史』)

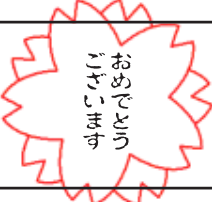
去る四月二十四日(日)、蔵本通支坊で初参式と入学奉告式が行われました。

今年(今年)は、初参式七名・入学奉告式八名で、いずれも例年の約半数の参加者でした。主催者側としてはさびしかったのですが、しかし参加者にとっては、一生に一度の、嬉しい、大切な行事です。人数が少なくなっても、なんとか続けていければと思います。また、今年(今年)は、「入学」だけではなく「入園」もないのですかと声をかけていただき、「そりやそうだ」ということで、入園奉告式も行いました。

さて、上の文章は、江戸時代に広島藩により編纂された歴史書物『芸藩通史』の文章です。そこには「子供が生まれたら男は何日、女は何日で宮参りをする、村落の親鸞宗(浄土真宗)を信ずる者はお寺に参つて改悔文(領解文)を聴かせる」とあり、当時行われていた真宗門徒の初参式の様子が窺われます。改悔文(領解文)とはもろもろの雑行雑修、自力の心をふりすてて」といふ、皆さんお馴染みの文です。親の願いが伝わってくるようですね。年配の方に尋ねると、食事の時、この領解文を言うか、お内仏(家の仏壇)に手を

合わせてこないとか、飯を食(く)わせてもらえなかった、と百人に尋ねたらまず百人がそうおっしゃいます。しかし、今の子に聞くと、百人が百人「そんなことは知らない」といいます。私の印象では、お内仏どころか「食事の時の合掌」「いただきます、ごちそうさま」もしていない子の方が多いのではないのでしょうか。

戦後六〇年、心の教育はこんなに変わってしまいましたが、時代はさらに激しく変わっています。家族形態も大家族から核家族が主流となりましたが、その核家族も一九八〇(昭和五十五年)年を境に減少しはじめ、かわりに単独者世帯が増加、少子化が問題となっています。家族形態の変化とともに子育ての形も多様化しましたが、今では子供の虐待、ネグレクト(育児拒否)が深刻な問題となっています。これから「誰が子育てをするのか」は大問題ですね。「親はなくても子は育つ」。以前、ある方にかういわれました。「戦後皆の心がすさんだ時代に、前任職さんらが日曜学校をしてくださって、貧しい中にも、楽しく皆が大切な心を教えていただきました。お寺の役割を教えるもたらった気がしました。どうかあゝべきかは分かりませんが、だれが世話をするにせよ、接する大人が連携をとりながら、ちゃんと教えていかねばと思います。



- 初参式参加者
 - 浦島 卓也
 - 齋藤 心優
 - 坂田 桃
 - 清水 まや
 - 藤井 亜衣
 - 堀井 理帆
 - 堀井 彩帆
- 入園入学奉告式参加者
 - 大澤 央
 - 葛西 涉
 - 久保 寿樹
 - 東 慎太郎
 - 向田 充希
 - 大澤 礼
 - 久保 花鈴
 - 東 涼太 (敬称略)



第 9 回 入 園 入 学 奉 告 式